

2026 年 5 月 8 日

「≪助ける者≫としての他者」

●創世記 2: 1~25

今日は、創世記第 2 章について皆さんと分かち合いたいと思います。

神がアダムをお創りになり、エデンの園に住まわせ、アダムがそこを耕し守るようにされたという有名な箇所です。非常に面白く、そして皆さんがよくご存じの、善悪の知恵の木の実、これは禁断の実とされるもの、それを取って食べてしまう話はまた後日にして、今日は、アダムから、神様が彼に合う、「助ける者」すなわち「女」を創造されたくだりについて、皆さんと分かち合いたいと思います。

女はアダムのあばら骨の一部を抜き取って創られるという衝撃的なお話です。が、ここで注目に値することは、女をアダムの「助ける者」としてお創りになったという点です。その前の箇所を見てみると、「主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形作り、人のところへ持って来て、人がそれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて生き物の名となった。人はあらゆる家畜、空の鳥、野のあらゆる獣に名をつけたが、自分に合う助ける者は見つけることができなかった」（19 節、20 節）とあります。

ここに出てくる「名前を呼ぶ」というアダムの行為、これは単にラベルをつけるということではありません。それならば、動物図鑑ができ上がるに過ぎないわけです。ここでいう名前とは、その存在の本質、役割、意味、時には使命まで含むものだったのです。つまりアダムは、動物や鳥たちと向き合い、「これはどういう存在なのか」を見つめ、受け取り、理解したと言えます。神様は、この地上のあらゆるものに、人がどんな名をつけるのを見ておられたわけですから。名前をつけることを、神様が人にやらせてくださった、というくだりを読むと、私は常に神様に「そうだったのだ！」と改めて感謝の思いを抱きます。神様は世界を自分が創った完成品としてではなく、最後の部分を人間にやらせてくださった。私たちに、神様のお仕事の一番大切な部分について、参与させてくださったのです。

ところで、その名前をつけるプロセスを経ても、アダムは、彼に合う助ける者が見つからなかったのです。すべてに向き合って名前をつけたのに、本当に自分に向き合える存在がないことに気づいた。ある意味、たくさんの生き物に囲まれてはいても孤独だったのです。そこで、神様はアダムの身体の一部から女を創造されるわけです。アダムが目覚めた時、「ついに、これこそ、私の骨の骨 私の肉の肉」（23 節）と言って喜びます。ついに「助ける者」が見つかった。何を助けるのか？ 生きとし生けるすべてのものを、神様に似せて神様が創造された二人の者に任せると言われたこと、そのことです。

アフリカの有名なことわざに、次のものがあります。「早く行きたければ一人で行け。遠くに行きたければ皆で行け」。ここで、日本語は「皆」と訳していますが、英語では “If you want to go fast, go alone. If you want to go far, go together” となります。“together” とい

う言葉は、二人以上を指しますね。英語では、fast と far は、スペリングも、音も少し似ていますが、大変面白い対比を示しています。ここでの「遠くに行く」行為は、単に距離の問題ではなく、成し遂げることの深さ、広さ、達成感の質、いろいろなことを含みます。アダム一人が、神の協同者となるよりも、二人で行うことの質の高さ、素晴らしさを、神様は期待されていたのかも知れません。

今日は、アダムとイブという最初の男女の話から始まり、皆さんもたった一人でこの世界で生きているわけないという話をしたかったのです。神が創造されたこの世界で、神の似姿として創られた皆さん一人ひとりが、お互いにとってお互いの「助ける者」となれるように、皆さんをここに置いてくださったのは神様です。神様の期待に添うことができるように、お互いを大切にしながら、早くなくてもいい、より遠くを目指し、より深いところを掘りながら、毎日を生き生きと過ごしてほしいと願っています。